

大仏は
なぜ紫香楽で
造られたのか

— 聖武天皇とその時代 —

目次

発刊にあたって

第一部 聖武天皇とその時代―天平文化と近江―

〔講演1〕

紫香楽宮の造営と難波宮

直木孝次郎 8

〔講演2〕

近江の天平彫刻について

井上一稔 46

第二部 大仏はなぜ紫香楽で造られたのか

〔基調講演〕

聖武天皇の東国行幸と皇位継承問題

遠山美都男 76

【事例報告1】

禾津頓宮とそのあとさき

—大津市膳所城下町遺跡の調査—

大崎哲人

112

【事例報告2】

紫香楽甲賀寺における大仏造営

—甲賀市信楽町鍛冶屋敷遺跡の調査から—

畑中英二

138

【討論】

バネラー／遠山美都男

大崎哲人

畑中英二

コーディネーター／大橋信弥

関係年表

169

講演1

紫香楽宮の造営と難波宮

大阪市立大学名誉教授

直木 孝次郎

最初に地図をご覧ください。この地図の真ん中よりちょっと下に見えるのが平城京でございます。平城京の右上、東北にあるのが恭仁京。

これが今日の話の出発地点になります。恭仁京から三十キロメートルほど東北に行きますと近江国の紫香楽宮になります。恭仁宮は南山城、京都府の南部です。

それからもうひとつ、難波宮はむろん、いまの大阪にあります。平城から西のほうへ、これも三十キロメートルと少しあるかと思えます。ただし難波へは途中、高安山や生駒山を越えて行きます。そういう位置関係です。いま琵琶湖西側のところに書いてある大津宮は、現在の天津の中心よりは少し北で、いま私たちのいるこのピアザ淡海の建物があるところは、この地図の大津宮よりはちょっと南東になるのでないかと思えます。だいたいそういう位置関係であるということをご覧いただいて、はじめに戻ります。



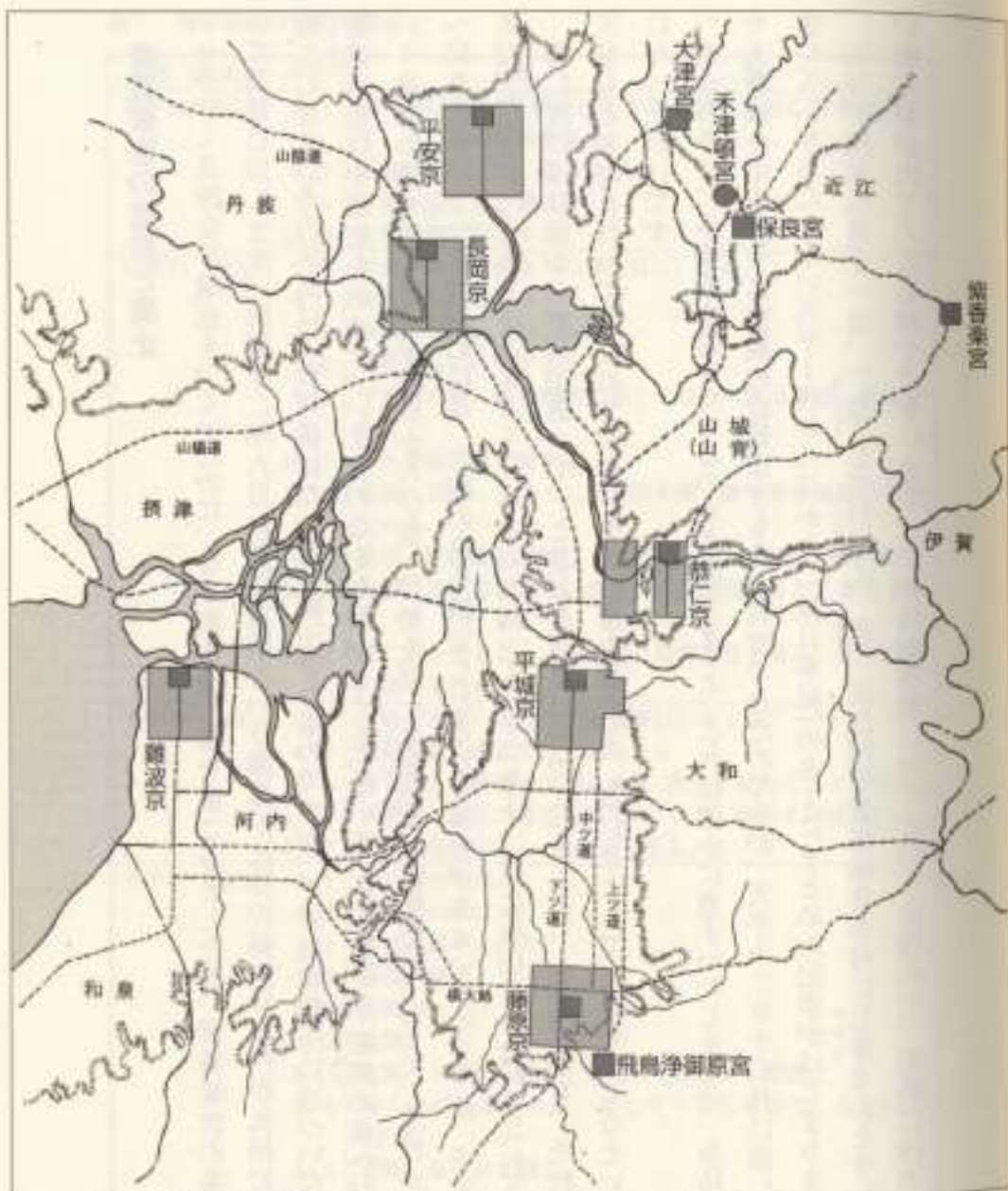


図1 古代宮都の位置図

近江の天平彫刻について

同志社大学教授

井上一穂

はじめに

今日の私の話は、「近江の天平彫刻」ということで、三つの像を中心に話をさせていただきましたと思います。

最初は、石山寺のご本尊のお話。これは今のご本尊ではなくて、奈良時代に造られたご本尊、ですから失われた仏像のお話ということになります。

二番目は、湖南省（旧甲西町）の善水寺ぜんすいじにあります誕生仏のお話。この展覧会の図録をお持ちの方は、一番正面に、背景の真ん中に仏像の写真が載っておりますが、その像でございます。

三番目として、地域を湖北に取りまして、時代としては奈良時代の後半のお話。これもたいへ



ん大事な仏像が鶴足寺（はつあしじ）というところに伝わっております。

本題に入る前に、「三宝絵詞」という十世紀の末に成立する書物がありますが、このなかに大和長谷寺（はせだ）の十一面観音像、これは平安時代もずいぶん信仰されて、京都の貴族たちもたくさんお参りに行くお寺なのですけれども、この観音像の材が近江のものであることを記した話（史料1）に注目しておきたいと思います。

史料1を読んでみますと、最初の「辛酉（かのとせう）の歳」というのは推古天皇の九年という、すごく古い時代なのですけれども、大水で高島の山から木が流れ出て琵琶湖に浮かんでいた。それが高島一帯の人たちにとっては祟りとなっていたとあります。

祟られては困るのでどうしようかと思っていたところ、出雲の大満（おほみづ）という人が、この木で十一面観音像をつくって災難を鎮めようとするわけです。

この後、話はいろいろ展開しますが、大満の願いは叶いませんで、結局、徳道上人がこの木を、現在の桜井市の長谷寺まで持っていて、十一面観音像に仕立て上げるのです。

この説話はいろいろな方面で興味深いのですが、何故に、長谷寺の木は近江・高島から出ているのかという点を考えてみますと、この問題を見事に解決された――と私は思っているのですが、瀬田勝哉さんという方が、次のようなことをおっしゃっています。

奈良時代、高島には高島の山作所と申しまして、東大寺の木の用材を出す所（きりば）があった。そこから切り出された木は、琵琶湖を通過して、瀬田川を通過して木津川を経て、奈良の都へ達するわけで、

聖武天皇の東国行幸と皇位継承問題

学習院大学講師

遠山 美都男

こんにちは。遠山です。よろしくお願ひします。

今日、私に与えられましたテーマは「聖武天皇の東国行幸」ということでございます。聖武天皇が平城京を出まして五年間帰ってこないこと。それを「彷徨五年」と言うわけですが、そのきっかけになったのが、この東国行幸ということになりました。あとで詳しく申しあげますように、この東国行幸のあとに本格的な「彷徨五年」が始まるということです。

いきなり冒頭でシンボジウムのタイトルの文句をつけるようで恐縮なのですが、聖武天皇にとって、その五年間が本当に「彷徨」といいますか、さすらいといいますが、目標の定まらない行動であったのかどうかということは、私も含めまして今日の皆さんのお話を総合したうえで考えなければいけないことなのではないかと思っています。



結論から先に、私の意見というか考えを一言で申しあげると、私は七四〇年から七四五年までの五年間は、決して彷徨とは言えないと。明らかに明確な目的、目標のあったうえでの一連の行動であると考えております。

本題に入る前に、ひとつだけ申しあげておきたいことがあります。それは六年前の一九九九年に角川書店から「彷徨の王権 聖武天皇」という本を出版しておりますが、それから六年の歳月がたちまして、現在の考えが前に書いたときの考えとは、だいぶ変わってきているということです。ですから、前に書いた本をお読みいただいた方には、たいへん申しわけないのですけれども、今回の東国行幸を含めまして、以前とはだいぶ考え方が変わってきているのだということを、あらかじめ白状といえますか、告白しておきます。

たとえば、角川書店で出した本のタイトルの一部に「彷徨」という文字が入っていますが、先ほども申しあげたとおり、現在私は「彷徨」の語は妥当性を欠くのではないかと考えております。

彷徨ではなかった東国行幸

まず初めに東国行幸の位置づけといえますか、そのアウトラインについてお話をしておきたいと思えます。また東国行幸の関係年表をご覧いただきながら聞いていただきたいと思います。

七四〇年（天平十二）八月に九州の大宰府で藤原広嗣の反乱が起きまして、これをきっかけにして聖武天皇は平城京をあとにするのですね。ただ、九州で起きた広嗣の乱が近畿地方に波及し

事例報告―

あわづのとんぐう

禾津頓宮とそのあとさき

―大津市膳所城下町遺跡の調査―

財団法人滋賀県文化財保護協会

大 崎 哲 人

恭仁宮への道―東国行幸・禾津頓宮の発見―

私からの事例報告といたしましては、平成十四年度に発掘調査を行い、聖武天皇の東国行幸において近江国志賀郡の禾津に天皇が宿泊した仮宮「禾津頓宮」の中心建物ではないかと考えられる大型掘立柱建物が見つかりました。大津市膳所城下町遺跡の発掘調査についてお話をさせていただきます。

内容としては、「禾津頓宮とそのあとさき」ということで、前段では禾津頓宮と考えられ



る大型掘立柱建物についてのお話をさせていただき、そのあとで、その造営前後の様相について、発掘調査で明らかになってきたことに関してのお話をさせていただきます。

膳所城下町遺跡は滋賀県大津市膳所二丁目、滋賀県立膳所高等学校を中心とした範囲にある遺跡であります。その場所は、琵琶湖の南湖の南端で、湖がその幅を狭めて、その姿を瀬田川という河川へと変えていく地点の琵琶湖の西岸で、ちょうど地形上の変換点にあたり、交通の要衝ともいえる位置に遺跡は立地しているということができるとおもいます。遺跡の現状は主に県立膳所高等学校の敷地となっておりますが、ここは相模川という琵琶湖に流れ込んでいく小河川が形成した扇状地のちようと真ん中あたりで、現在は住宅地がかなり立て込んでいて眺めはそれほど良くはないのですが、もともとは周囲を見渡すことができる、小高い微高地上に遺跡は立地しているということがいえます。

膳所城下町遺跡から約五〇〇メートル東の琵琶湖岸には、江戸時代初頭に築かれた膳所城の本丸があり、調査をおこなった膳所高等学校の周辺は、膳所城の城下町を描いた絵図（膳所総絵図）一七〇二年（大津市指定文化財）によりますと侍屋敷が建ち並んでいた一角にあたります。そしてこの場所は、幕末になりますと膳所藩の学問所である藩校「てんそはんがく邊義堂」が置かれることになりまして、県立膳所高等学校の敷地は、その藩校の敷地をほぼ踏襲して今日に至っているということになります。

平成十四年度に実施しました発掘調査は、高校の校舎の新築工事に先立って行ったもので、そ

紫香楽甲賀寺こうからにおける大仏造営

— 甲賀市信楽町鍛冶屋敷遺跡の調査から —
かじやしる

財団法人滋賀県文化財保護協会

畑中英二

東大寺の大仏のことはよく知られておりますが、実は、つくりはじめたのが近江国甲賀郡紫香楽（現在の滋賀県甲賀市信楽町）にある甲賀寺であったということをご存知でしょうか。地元の方はよくご存知なのですが、広く知られているとはいえません。

そこで、聖武天皇の時代における最大の出来事である大仏造営事業に焦点をあて、中でも最新の考古学の成果を紹介しながら当時の紫香楽でどのような出来事が起こっていたのかについてお話ししていこうと思います。とりわけ、近年話題になりました鍛冶屋敷遺跡の調査から何がわかってきたのかについて、取り上げることとします。



大仏とは

仏にもいろいろな種類がございますけれども、東大寺の大仏は、毘盧遮那仏びろしなぶつと呼ばれているものです。毘盧遮那仏というのは、もともとインドのヴァイローチヤーナと呼ばれる太陽神でした。それが仏教に取り込まれていくなかで毘盧遮那仏に転化していったといわれています。

「梵網經ぼんむすしやう」というお経によると、この仏は「蓮華藏世界れんげざいせかい」の主として君臨し、万物の創造者であり宇宙の中心におられるとされます。蓮華藏世界とは、千枚の蓮の華からなり、その千枚の華一つひとつに大釈迦がおられて、またその一つひとつの華の中には百億の世界があつてそれぞれに小釈迦がおられるというものです。その頂点に君臨しているのが毘盧舍那仏であるということなのです。非常に大きな世界観をもった仏であるといえるのです。

現在の東大寺の大仏は、創建当時のものは腰から下しか残っておりませんけれども、台座の蓮弁べんに蓮花藏世界が描かれています。横線を引いて、いろいろな家があつたり仏がいたり、また横線が引かれて……いろいろな世界の繰り返し描かれています。聖武天皇は、そういった世界の頂点に君臨する仏をつくろうとしたということでもあります。

新たな聖武天皇像

聖武天皇はどのような人だったのだろうか、ということが近年あらためて議論になっていきます。